

## 大項目 4 学生の受け入れ

(目標)

教育目標を適切に反映させた学生の受け入れ方針を定め、その方針に基づいて適切な体制を整えた上で、適正かつ公正な受け入れを行う。

また、種類・性格・教員組織、施設・設備等の諸条件を基礎に学生収容定員を定めるとともに、その数に基づいて適正な数を受け入れ、教育目標に即した教育・研究指導を行い、教育上の効果を高める。

### 1. 学部における学生の受け入れ

A群 大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学者選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性

[現状把握]

造形学部では多様な個性、能力、可能性を持つ学生を受け入れるため、一般入学試験と公募制推薦入学試験の2通りの選抜方法を採用している。平成16年度の入学定員は表1の通りである。

〈表1 造形学部入学定員〉

学部	学科	入学定員	
造形学部	日本画学科	35	
	油絵学科	135	
	彫刻学科	33	
	視覚伝達デザイン学科	100	
	工芸工業デザイン学科	130	
	空間演出デザイン学科	115	
	建築学科	80	
	基礎デザイン学科	70	
	映像学科	<一般>	75
		<公募制推薦>	5
	芸術文化 学科	<一般>	80
		<公募制推薦>	20
デザイン情報学科	100		

一般入学試験は造形学部の中心的な試験方法として位置づけられており、入学者の97.7% (大学基礎データ・表13) を占めている。その目的は基礎学力および入学後に各学科のカリキュラムを履修するにあたって必要となる基礎的な技能、知識を評価することにある。

## 学生の受け入れ

試験内容は国語・外国語試験と学科別専門科目試験に分けられる。国語・外国語試験は、前期日程5学科（油絵学科、視覚伝達デザイン学科、工芸工業デザイン学科、芸術文化学科、デザイン情報学科）共通、および後期日程6学科（日本画学科、彫刻学科、空間演出デザイン学科、建築学科、基礎デザイン学科、映像学科）共通の2回実施される。なお、外国語試験は英語、フランス語、ドイツ語より1科目選択となっている。

一方、学科別専門科目試験は各学科の専門性、入学後に履修するカリキュラムに基づき、それぞれの学科ごとに独自の試験科目、配点、出題内容となっている。大学の教育内容の性質上、すべての学科が実技試験を設けているが、一部の学科については数学、小論文等との選択制になっている。また、建築学科については3つの試験方式から1つを選択して受験することとなっている。これは選択の幅を増やすことによって多様な個性、能力、可能性を評価するためである。平成16年度の試験科目、配点は表2の通りである。

また、一般入学試験においては、「国語・外国語科目または専門試験科目の得点合計が90%以上の者については、高得点順の合格最低点に満たない場合でも、各学科毎のその入学定員の5%を限度として合格とする。」という判定基準を設けている。これは一般入学試験の枠内でより多様な個性、能力、可能性を持つ学生を受け入れることを目的としている。平成16年度には学部全体で9名の者がこの判定基準により合格と判定された。

なお、外国人留学生、帰国子女に対する入学者選抜は、定員を設けての特別入試等は実施せず、一般入学試験のうち「国語」および「外国語」を「日本語」および「面接」に振り替えて実施している。学科別専門科目試験は一般の受験と同条件、同内容となる。可否についても一般の受験生と併せて判定される。平成16年度は学部全体で71名の志願があり、その内29名の者が合格した。

公募制推薦入学試験は平成16年度より新たに導入された試験方法である。その目的は高等学校での学習成果や面接等を重視することにより、試験成績に表れない創造的な能力や資質をみることにあり、映像学科および芸術文化学科の2学科で実施している。募集人員は映像学科5名、芸術文化学科20名である。出願に際しては高等学校調査書の評定平均値3.8以上および学校長の推薦を条件としており、高等学校における学習成果を尊重している。試験方法は、まず一次選考として映像学科においては自己推薦調書による審査を、芸術文化学科においては自己推薦調書および課題レポートによる審査を行い、二次選考では、映像学科においては構想力テスト（課題に基づくプレゼンテーション）および面接を、芸術文化学科においては小論文、プレゼンテーションおよび面接を課している。平成16年度は全入学者中の2.3%（大学基礎データ・表13）が公募制推薦入学試験によるものである。

以上のほかに、3年次編入学試験も実施している。その詳細については(13)編入学生及び転科学生の状況の項で述べる。

### [点検・評価]

造形学部一般入学試験の過去5年間の志願状況は表3の通りである。志願者数が漸減しているものの、募集定員に対する志願者数は約7.7倍あり、一般入学試験の主な目的である基礎学力および入学後に各学科のカリキュラムを履修するにあたって必要となる基礎的な技能、知識を持った学生の選抜、確保という点では所期の目的を達成しているといえる。

〈表 2 造形学部一般入学試験科目・配点〉

日程	学科	科目	配点	科目	配点	総点
前期日程	油絵学科	国語 外国語	100 100	デッサン 油絵 ]	300	500
	視覚伝達デザイン学科			鉛筆デッサン デザイン	150 150	500
	工芸工業デザイン学科			鉛筆デッサン デザイン	150 150	500
	芸術文化学科			数学、小論文、造形表現テスト のうち1科目選択	100	300
	デザイン情報学科			数 学、造 形 表 現 テ ス ト のうち1科目選択	150	350
後期日程	日本画学科	国語 外国語	100 100	鉛筆デッサン 着色写生 ]	300	500
	彫刻学科			鉛筆デッサン	300	500
	空間演出デザイン学科			鉛筆デッサン デザイン	150 150	500
	建築学科			[選択 A] 数学 鉛筆デッサン	200 100	500
				[選択 B] 数学 鉛筆デッサン	100 200	
				[選択 C] 立体構成 鉛筆デッサン	100 200	
	基礎デザイン学科			小論文 数学、基礎造形のうち1科目選択	100 100	400
映像学科	数学、小論文、鉛筆デッサン のうち1科目選択	150	500			
		感覚テスト		150		

〈表 3 造形学部一般入学試験志願状況〉

	平成 12 年度	平成 13 年度	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度
募集定員	978	978	978	978	953
志願者数	9,612	9,162	8,732	7,935	7,412
合格者数	1,204	1,269	1,369	1,373	1,365
倍率(志願者数/合格者)	8.0	7.2	6.4	5.8	5.4

## 学生の受け入れ

また公募制推薦入学試験の平成 16 年度の志願状況は表 4 の通りである。導入初年より各学科の教育内容に対して高い意欲を持った志願者を入学させることができたという点では高く評価できる。ただし芸術文化学科においては募集人員 20 名に対して志願者が 17 名であり、募集人員に達しなかった。高等学校、予備校への周知が至らなかったのがその大きな原因と考えられる。

〈表 4 造形学部公募制推薦入学試験志願状況〉

学科名	募集人員	志願者数	合格者数
映像学科	5	30	6
芸術文化学科	20	17	17
合計	25	47	23

基礎学力および入学後に各学科のカリキュラムを履修するにあたって必要となる基礎的な技能、知識を持った学生、および試験成績に表れない創造的な能力や資質を持った学生の双方を受け入れることができた点で、複数の入学者選抜方法の導入については高く評価できる。

なお、入学者選抜方法ごとの募集人員の割合は現時点では概ね適切であると考えている。

### [改善・改革方策]

一般入学試験については、ほぼ所期の目的を達成しており、平成 16 年 5 月現在、大きな改革は考えられていない。

公募制推薦入学試験についても、導入直後であり、大きな改革は考えられていない。映像学科、芸術文化学科以外の学科については現時点では推薦入学試験を導入する予定はないが、今後については検討を要する。

なお、大学入試センター試験の導入についてはかつて入学試験委員会で全学的な検討がなされたが、平成 16 年 5 月の時点では具体的な導入予定はなかった。その後、平成 18 年度から入学試験委員会で検討が開始されることとなった。

A 群 入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係

B 群 入学者受け入れ方針と入学者選抜方法、カリキュラムとの関係

C 群 学部・学科等のカリキュラムと入試科目との関係

### [現状把握]

本学は「真に人間の自由に達する美術教育」、「教養を有する美術家養成」を建学の精神とし、教育目的として、「美術、デザイン及び建築に関する学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の技能、理論及び応用を教授研究し、人格の完成を図り、個性豊かな教養の高い人材を育成し、もって文化の創造発展、国家社会の福祉に貢献することを目的とする。」(武蔵野美術大学学則第 1 章) ことを掲げている。

この建学の精神、教育目的は入学者の受け入れにも反映されており、造形の専門的な内容を学ぶために必要な技能、知識だけではなく、教養の基礎となる学力を併せ持つ人材を

受け入れるための入学者選抜となっている。一般入学試験においては全学科に「国語」と「外国語」の試験科目を課している。「国語」は基礎的言語能力および言語表現に対する理解力、「外国語」は学科専攻に必要とされる国際性の基礎となる外国語の能力をみることを目的としている。また、学科別専門科目試験には「デッサン」「デザイン」等の各学科の専門性に係わる実技試験科目に加えて、選択として「数学」と「小論文」等の科目も設けている。「数学」は論理的思考能力をみるためであり、「小論文」についても数学同様、言語表現というよりはむしろ論理的思考能力をみることを目的としている。

造形学部のカリキュラムは、文化総合科目と造形専門科目に分かれている。文化総合科目は教養文化に関する科目群、言語文化に関する科目群、身体文化に関する科目群、造形文化に関する科目群によって構成されており、美術・デザイン系のみならず、さまざまな領域の科目が開設されている。造形専門科目は各学科が開設しているそれぞれの専門分野を追究する科目が中心となっている。すべての学生は卒業所要単位 124 単位のうち、文化総合科目から 40～50 単位、造形専門科目から 50～60 単位を修得することとなっている(残りの 24 単位については自由選択枠)。

建学の精神である、「教養を有する美術家養成」を反映したもので、専門的な技能、知識に偏らず、幅広い教養を学ばせようとするものである。このカリキュラムは一般入学試験の試験科目にも連動しており、文化総合科目の素養を国語・外国語試験で、造形専門科目の素養を学科別専門科目試験で考查している。また、一般入学試験における国語・外国語と学科別専門科目の配点比率もこのカリキュラムに対応して設定されている。公募制推薦入学試験においては調査書の評定平均値 3.8 以上を出願条件とし、高等学校等での学習成果を尊重している。

一方、各学科の教育は専門性がきわめて高く、各学科の専門科目は1年次より開設されている。そのため、一般入学試験、公募制推薦入学試験とも、学科別専門科目試験は各学科の専門性に基づいた独自の出題となっている。これは各学科のカリキュラムを履修するにあたって基礎となる技能、知識を判定するためである。

#### [点検・評価]

入学者受け入れ方針は本学の理念、教育目的等にかなったものとして評価できる。一般入学試験における判定は、学科別専門試験科目の成績を重視するのではなく、国語、外国語、学科別専門科目の合計点の高得点順に合格を決定している。また、合計点で合格圏内であっても、1科目でも配点の20%未満の得点がある場合には不合格となる。公募制推薦入学試験においても、全試験科目の合計点の高得点順に合格を決定し、合計点で合格圏内であっても、1科目でも配点の20%未満の得点がある場合には不合格となる。これは、造形の実技のみに優れた人材を受け入れ、さらに専門的な技能、知識のみを伸ばしていこうとするのではなく、国語、外国語、自己推薦調書等を可否の判定に加えることによって、基礎的な教養を併せ持つ人材を受け入れ、幅広い教養を有する美術家を養成していくという本学の教育姿勢を示すものとして評価できる。

学科別専門科目試験には従来からの「デッサン」「デザイン」等の各学科の専門実技試験科目に加え、学科専攻によっては選択として「数学」と「小論文」の入試科目を設けている。近年のデザイン系分野での造形教育はコンピューターをツールとして用いることに比

## 学生の受け入れ

重が置かれつつあるが、このことは言語能力と数的論理能力を基盤とした高い造形表現を目指す教育目的に対応したものとして高く評価できる。また学科別専門試験科目において選択制を採り入れていることについては、選択制度を導入することによって、選択した入試科目により資質の違った学生を入学させ、入学後に相補的な関係がつけられることを目的としている。その結果、意図した通り多様な資質をもった学生が集まり、互いを刺激しあい、より良い学習環境を形成するに至っており、高く評価できる。

公募制推薦入学試験については、例えば映像学科ではいくつかの表現分野があるが、どの分野でも作品制作において共同作業を必要とするものが比較的多い。共同作業には協調性、コミュニケーション能力、組織力、指導力などの資質・能力が必要であるが、それらは現在の筆記主体の入学試験で把握することは困難である。そのため公募制推薦入学試験を実施し、「面接」などによる評価を重視することによって映像学科にふさわしい資質を持った学生を獲得することを期しているが、狙い通りに成果を上げており、評価できる。

入学試験の判定基準は毎年教授会において確認されている。入学試験科目、配点等についても毎年入学試験委員会での検討を経た後、教授会において確認されている。

以上のようにカリキュラムと入学試験科目、配点等については、整合性が高く、概ね良好であり、本学が建学以来目的として掲げてきた美術デザインの創造的な作家の養成と豊かな教養を備えた社会人の教育という教育理念を発展させることができるものと評価できる。

### [改善・改革方策]

現在のところ大きな改善・改革は予定されていないが、今後公募制推薦入学試験の拡大、大学入試センター試験の導入等を検討する際には、入学者受け入れ方針と本学の理念、教育目的との関係、入学試験科目、配点等について見直しを要する。

## B群 入学者選抜試験実施体制の適切性

### [現状把握]

入学試験に関する業務を円滑に執行するために、入試本部を設置し、入試課および入学試験委員会が置かれている。入学試験委員会は各研究室より選出された委員、国語の出題委員会より選出された委員、外国語の出題委員会より選出された委員、数学の出題委員会より選出された委員、入試準備室（下段参照）の室長、入試本部長、教務部長、教務部事務部長、企画部事務部長、入試課長、教務課学事担当課長をもって構成されており、各年度のすべての入学試験の大綱はこの委員会で協議された後、教授会において確認される。

一般入学試験の実施に際しては、全学的な臨時の実施体制を編成している。総責任者は学長であるが、入学試験の実施運営に当たっての統括責任者として入試本部長制がとられている。入試本部長は学長補佐から選任され、その任期は2年である。入学試験の業務については全専任教員、助手、職員がそれぞれ分担して当たることとしている。統括機関である入試本部のもとに、入試運営室（試験問題の管理、採点の進行等）、入試準備室（試験会場の整備、試験監督の配当、実技試験のモチーフ設定等）、集計室（採点結果の集計等）、志願書受付担当、入構受付担当、受験票再発行担当などが置かれ、入学試験の円滑な実施

にあたっている。一方、公募制推薦入学試験、3年次編入学試験については、志願者数がそれほど多くないため、入試本部の統轄のもとに入試課と各学科研究室において実施している。

#### [点検・評価]

試験の厳正かつ公正な実施を確保するために、試験監督には学生アルバイトは一切使用せず、専任教員、助手、職員が当たっており、試験監督として配当される専任教員、助手、職員に対しては、入試期間直前に試験監督説明会を開催するほか、試験当日にそれぞれの試験科目の監督業務についてさらにきめ細かい説明を行っている。また入学試験実施に当たって臨時に設けられた上記の入試運営室、入試準備室、各担当は入学試験実施前に入念な打ち合わせを行い、試験の実施に際して各々の業務を円滑にこなしており、問題ないといえる。

入試本部、入学試験委員会は常設されており、入学試験の実施に関する検討、今後の入学試験についての検討が通年行われている。また、入試課も常設されており、専任の職員が入学試験実施に関わる業務を通年行っている。

#### [改善・改革方策]

入試実施体制は現在のところ特に改善・改革は必要ないが、今後公募制推薦入学試験の拡大、大学入試センター試験の導入等を検討する際には、それに対応した実施体制の編成を併せて検討する必要がある。平成18年度より検討に入った。

### B群 入学者選抜基準の透明性

#### [現状把握]

造形学部入学試験（一般）の合否判定基準は以下の通りである。

- ・ 総得点の高得点順に合格者とする。
- ・ 国語・外国語科目または専門試験科目の得点合計が90%以上の者については、高得点順の合格最低点に満たない場合でも、各学科毎のその入学定員の5%を限度として合格とする。
- ・ 受験科目のうち1科目でも配点の20%未満の得点がある場合は、上記に該当する場合でも不合格とする。

判定基準は毎年教授会において確認がなされ、学生募集要項に記載される。また、進学相談会、進学懇談会において受験生、高等学校教員、予備校教員に対して公表される。

#### [点検・評価]

判定基準は明確に示されており、公表の方法も問題ない。

判定基準にある「国語・外国語科目または専門試験科目の得点合計が90%以上の者については、高得点順の合格最低点に満たない場合でも、各学科毎のその入学定員の5%を限度として合格とする。」は多様な個性、能力を持った学生の受け入れを目的に平成7年度入学試験から実施されており、本学の入学者選抜の特徴となっている。

## 学生の受け入れ

### [改善・改革方策]

現在のところ特に改革・改善すべき点はないと思われる。

なお、判定基準にある「国語・外国語科目または専門試験科目の得点合計が90%以上の者については、高得点順の合格最低点に満たない場合でも、各学科毎のその入学定員の5%を限度として合格とする。」に該当して入学してきた学生については、その後の経過を追跡調査しており、平成12年に当時の該当学生全員にヒアリングを実施し、その成果を将来構想委員会において報告したほか、数年毎に、多様な個性、能力を持った学生の受け入れ方法として適切であるかを入学試験委員会において見直している。

## C群 入学者選抜とその結果の公正性・妥当性を確保するシステムの導入状況

### [現状把握]

すべての入学試験において匿名での採点を行っている。採点終了後に判定基準に基づき入試本部において合格者原案が作成され、造形学部教授会に所属する全教員によって構成される判定会議において合格者を決定、発表している。さらに、正規合格者のほかに必要に応じて補欠者を設けている。補欠者には補欠順位を付した補欠通知を本人に送付している。繰り上げが必要な場合は、補欠者の上位から順次繰り上げ合格を通知している。

また、入学試験の成績は受験生に対して平成13年度から開示されている。

### [点検・評価]

受験生の匿名性は厳正に守られており、合格者の決定も判定会議において厳正、公正に決定されている。補欠については、補欠順位を付するための基準を入学試験実施前の教授会において確認し、それに基づき厳正、公正に順位を付している。

成績開示は受験生に対するフィードバックであると同時に入学試験の公正性を学外に対して明確に示すものとなっている。従来、出願時に開示希望の有無を確認し、合格発表終了後に希望者に郵送していたが、封入ミス等の防止のため、平成16年度よりインターネットを利用することとした。希望者は一定の期間、インターネットで個別の暗証番号等を入力して自分の成績を確認できるようになっている。

### [改善・改革方策]

現在のところ特に改善・改革すべき点はないと思われる。成績開示については、開示期間終了後の問い合わせが多数出たため、希望者が期間内に忘れずに成績を確認できるよう開示期間、利用方法等をより周知させる必要がある。

## B群 各年の入試問題を検証する仕組みの導入状況

### [現状把握]

入試問題作成に際して、国語、外国語、数学については毎年出題委員会を組織しており、過去の入試問題の検証を行い、その結果をふまえた上で当該年度の試験問題作成をしている。

学科別専門試験については、各学科において入試終了後に検証がなされ、検証結果をふまえた上で、当該年度の問題が作成されている。作成された試験問題は入試本部において過去数年間の試験問題との比較、試験問題としての適切性、公正な実施が可能か等の検証が行われ、問題作成者との協議を重ねた上で決定される。また、試験実施後の判定会議の席上で、すべての科目について出題者より出題主旨説明、および採点結果の報告がなされている。

[点検・評価]

全学的に入試問題を検証する委員会を設ける等の仕組みは導入していないものの、入試本部において当該年度のすべての試験問題の検証は行われているため、入学試験の実施にあたっては現在までのところ問題はない。

[改善・改革方策]

平成 16 年 5 月の時点では、改善・改革の予定はない。今後、全学的な関わりのもとに入試問題を検証する仕組み等を設ける場合、第三者的視点からの検証はより充実するものの、学科別専門科目試験については各学科の出題の独自性が薄れることも考えられるため、本学の入学試験のあり方もふまえた上で慎重に検討する必要がある。そこで、平成 17 年度より検討が開始されている。

A 群・学生収容定員と在籍学生数、(編) 入学定員と入学者数の比率の適切性

- ・定員超過の著しい学部・学科等における定員適正化に向けた努力の状況

B 定員充足率の確認の上に立った組織改組、定員変更の可能性を検証する仕組みの導入状況

[現状把握]

造形学部の募集定員、3 年次編入学定員、収容定員と在籍学生数は「大学基礎データ調書 (表 14)」の通りであり、入学定員の合計は平成 16 年度には 978 名となっている。編入学定員は 3 年次についてのものであるが、定員の定めのある学科については合計 75 名となっており、その他の定員の定めのない学科については若干名を受け入れている。これを合わせた全学部全学年の収容定員は 4,062 名である。

日本画学科は収容定員 140 名に対し在籍者が 139 名となっており、収容定員に対する比率は 0.99 倍となっている。油絵学科は収容定員 580 名に対し在籍学生数が 576 名となっており、収容定員に対する比率は 0.99 倍となっている。彫刻学科は収容定員 132 名に対し在籍者が 146 名となっており、収容定員に対する比率は 1.10 倍となっている。視覚伝達デザイン学科は収容定員 420 名に対し在籍学生数が 442 名となっており、収容定員に対する比率は 1.05 倍となっている。工芸工業デザイン学科は収容定員 560 名に対し在籍者が 565 名となっており、収容定員に対する比率は 1.01 倍となっている。空間演出デザイン学科は収容定員 490 名に対し在籍学生数が 509 名となっており、収容定員に対する比率は 1.03 倍となっている。建築学科は収容定員 320 名に対し在籍者が 330 名となっており、収容定員に対する比率は 1.03 倍となっている。基礎デザイン学科は収容定員 300 名に対し在籍学

## 学生の受け入れ

生数が 305 名となっており、収容定員に対する比率は 1.01 倍となっている。映像学科は収容定員 320 名に対し在籍学生数が 358 名となっており、収容定員に対する比率は 1.11 倍となっている。芸術文化学科は収容定員 400 名に対し在籍者が 402 名となっており、収容定員に対する比率は 1.00 倍となっている。デザイン情報学科は収容定員 400 名に対し在籍学生数が 432 名となっており、収容定員に対する比率は 1.08 倍となっている。

全学部全学年の収容定員に対しての 3 年次編入学定員若干名を合わせた造形学部全学年の在籍学生数は留年者 52 名を含め 4,204 名で収容定員の 1.03 倍となっている。

### [点検・評価]

造形学部では 18 歳人口の減少・高度情報化社会・短期大学部入学志望者の 4 年生大学への志望の変化・臨時的定員廃止等への対応、定員超過率の是正を目的として平成 11 年度から短期大学部の入学定員を造形学部の新設 2 学科（芸術文化学科、デザイン情報学科）及び既存 9 学科（日本画学科、油絵学科、彫刻学科、視覚伝達デザイン学科、工芸工業デザイン学科、空間演出デザイン学科、建築学科、基礎デザイン学科、映像学科）へ振り替えを行い、また臨時的定員増の廃止にともない、臨時的定員のうち二分の一に相当する定員を恒常的定員に組み入れるといった教育組織の改組転換を行った。その結果、平成 10 年度までの造形学部の入学定員は 738 名から平成 11 年度には 978 名となり現在に至っている。

退学者、留年・卒業延期者の数を考慮し収容定員と学生数が同じになるように入学者数の調整を行っている。入学試験の合格者の受入人数については過去の退学者数を慎重に見込んだ上で、定員割れを起こさないように考慮し、決定している。収容施設等の制約があるため受入人数については厳格に守られており、欠員が生じた場合には、その都度補欠者から 1 名ずつの繰り上げを行っている。現状の説明通り、全学部全学年の収容定員に対する学生数の比率は 1.03 倍であり、定員超過の著しい学科は無い。収容定員と学生数は適正な水準にあるといえる。

3 年次編入学試験については、編入制度として学内短期大学部学生の進学希望に応え、造形学部・短期大学部連動教育として有効に位置づけられていたと同時に、学内外の他領域からの進学希望に応えることで、進路選択の幅を広げ、領域間の交流を図ることを目的としていたが、上記の教育組織の改組転換により平成 13 年度以降からは本学の短期大学部からの志願者はなくなる結果となった。平成 16 年度油絵学科の 3 年次編入学試験の合格者は定員 20 名に対して 15 名となっている。これは連動教育を前提に編入学の定員枠を設けていた油絵学科においては、学内短期大学部からの編入希望者がいなくなったとき、実際に編入試験を行って水準的に見て受け入れることが無理であれば、定員枠に達しないこともやむを得ないとの判断によった結果である。同様に、編入定員を設けている工芸工業デザイン学科や基礎デザイン学科等からも、募集定員を充足するに足る編入生を受け入れることは、学生の質の維持から難しいということが報告されており、3 年次編入学試験によって現在の水準の学生を引き続き定員通り確保できるかは、多くの問題を含んでいる。

また転科制度について、「3 年次転科」として学則に位置づけられた転科を 3 年次編入学試験合格者の中の学籍上の取り扱いとして処理しているが、3 年次編入学試験による転科者が増大しつつある現状に対しては、制度上問題があると言わねばならない。

公募制推薦入学試験については平成 16 年度映像学科募集人員 5 名に対して 30 名の出願

があり、6名を合格者としたが、芸術文化学科は募集人員20名に対して17名の出願、17名の合格者と募集定員を割り込む結果となっている。3年次編入学試験同様に公募制推薦入学試験においても、引き続き定員通り確保できるかは、難しい問題を含んでいると言わねばならない。

芸術文化学科からは教育内容に照らして、開設時からの入学定員の見直しの要望が出されている。

#### [改善・改革方策]

学生収容定員と在籍者数および定員管理は適切であり、改善・改革すべき点はない。

欠員を生じている学科はないが、本学の入学志願者の減少が進行し、倍率の低下が目立つ学科が存在する状況は、本学のあり方についての真剣な再検討が求められているといえる。

主任教授による会議、並びに教授会において、芸術文化学科から要望されている入学定員削減の対応をはじめ、緊急性が認められる入学定員と編入学定員を平成18年4月より実施可能な形で検討することが急務であるとの結論に至り、1年間に期間を限定し「学科定員等検討委員会」を設けることとした。

検討事項としては、本学のこれからのあり方を見据えた上で、「大学全体の規模を変更しない範囲で」との条件のもとに、定員充足率・教育内容といった観点からみた造形学部各学科の入学定員及び専攻等の学科別定員の見直しと、改組による本学短期大学の存在を前提とした編入学定員の設定を見直し、定員の再配分を検討することとした。また、本学在学者の転科については、教育課程検討専門委員会からの「本学の転科制度のあり方について」の報告を踏まえ、3年次編入学試験とは切り離れた制度として位置づける等、制度の明確化を検討することとした。

#### A群 退学者の状況と退学理由の把握状況

##### [現状把握]

造形学部における過去3年間（平成13年度から平成15年度）の退学者数及び除籍者数の状況は「大学基礎データ調書（表17）」の通りである。

平成13年度から平成15年度までの3年間の学科別の退学者及び除籍者の合計は日本画学科11名、油絵学科36名、彫刻学科8名、視覚伝達デザイン学科12名、工芸工業デザイン学科27名、空間演出デザイン学科16名、建築学科25名、基礎デザイン学科18名、映像学科11名、芸術文化学科42名、デザイン情報学科24名となっている。

造形学部全体の退学理由は、平成13年度68名の内、一身上の理由による者が28名、連続留年（連続卒延）によるものが9名、学費未納によるものが21名、経済上の理由によるものが1名、病気によるもの4名、留学によるもの1名、死亡によるもの2名、その他2名となっている。平成14年度70名の内、一身上の理由による者が26名、連続留年（連続卒延）によるものが12名、学費未納によるものが11名、経済上の理由によるものが4名、留学・病気・死亡によるもの各1名、その他14名となっている。平成15年度92名の内、一身上の理由による者が32名、連続留年（連続卒延）によるものが13名、学費未納

## 学生の受け入れ

によるものが20名、経済上の理由によるものが3名、病気によるもの4名、留学によるもの2名、死亡によるもの1名、その他17名となっている。一身上の理由、その他には進路変更（他大学進学）、経済上の問題等さまざまな理由が包含されている。

病気その他やむを得ない理由によって退学しようとするときは学長に願い出ることとされているが、退学希望者に対しての事務手続きは、まず退学希望者がその旨を教務課授業担当へ申し出た後、学籍担当者が退学の事務的な手続きの説明を行い、その時点で退学理由の聴取等を行っている。「退学願」は基本的に教務課学籍担当まで持参させ、提出させている。ただし、病状によっては郵送でも受理している。提出する前提として、所属学科研究室への本人からの報告を進言しているが義務付けてはいない。「退学願」は学生生活委員会委員、学年担当教授をへて主任教授の捺印がなされた後、学長宛提出され、直近の教授会にて決済される。上記の連続留年（連続卒延）、学費未納、死亡等の場合には命令退学とされる。

### [点検・評価]

造形学部の各年度の在籍者数（5月1日現在）に対する退学者及び除籍者の割合は表5の通りである。なお、芸術文化学科・デザイン情報学科は平成11年度に開設されたため、平成13年度時点では3年次生までしか在籍していない。そのため在籍者数に対する割合は3年次生までが対象となっている。

〈表5 在籍者に対する退学者割合の推移〉

年度	平成13年度			平成14年度			平成15年度		
	在籍者	退学者	比(%)	在籍者	退学者	比(%)	在籍者	退学者	比(%)
日本画	142	1	0.70	141	5	3.55	141	5	3.55
油絵	572	7	1.22	578	14	2.42	581	15	2.58
彫刻	141	2	1.42	138	1	0.72	142	5	3.52
視覚伝達デザイン	421	1	0.24	434	8	1.84	437	3	0.69
工芸工業デザイン	540	6	1.11	562	6	1.07	569	15	2.64
空間演出デザイン	500	6	1.20	499	3	0.60	507	7	1.38
建築	338	8	2.37	329	8	2.43	329	9	2.74
基礎デザイン	296	6	2.03	292	4	1.37	302	8	2.65
映像	326	6	1.84	338	3	0.89	337	2	0.59
芸術文化	305	16	5.25	400	13	3.25	399	13	3.26
デザイン情報	301	9	2.99	400	5	1.25	417	10	2.40
計	3,882	68	1.75	4,111	70	1.70	4,161	92	2.21

平成13年度から平成15年度までの3年間の学科別の退学者及び除籍者の割合をみると、日本画学科、彫刻学科は在籍者数が他学科に比べ少数であるといったことも考慮しなければならないが、両学科と芸術文化学科の退学者率が3%台とやや高いように思える。しかし、造形学部全体の在籍者数に対する退学者及び除籍者の割合の平均は1.89%であり、2%程度と大学全体からみて低水準であるといえる。

退学者及び除籍者の学年別の内訳では、1・2年次生に多いようにもみえるが、平成15年度をみると特に特定の学年に偏っているわけではない（大学基礎データ調査・表17）。多くは退学意思表示がなされた段階で、各学科研究室の主任、教務委員、担当助手のもとで退学理由の把握をした上で、書類を作成している。かなり丁寧な対応をとっているといえよう。

#### [改善・改革方策]

改善・改革すべき点はない。平成13年から「学生相談室」を設け、学業や経済上の問題他、学生生活全般にわたる学生の抱える種々の悩み事等の相談に応じており、このことが退学者を減じる一助となっている。

経済上の問題を退学理由とする者に対しての方策としては、学力、人物ともに優れ、経済的に修学が困難であると認められるものについては、すでに武蔵野美術大学奨学金等の学内奨学金（贈与）制度やその他種々の奨学金制度が設けられているが、武蔵野美術大学奨学金については平成15年度から増額がなされ、さらなる制度の充実がはかられている。また、家計を支えている人の失職、死亡、不慮の事故（災害など）によって家計が急変し、学業の継続が難しくなった場合には、定期採用枠とは別に奨学金の緊急採用枠を設けており、学生生活課が窓口となってこれに対応している。平成12年度までは緊急採用枠は3名であったが、平成13年度以降さらに枠を拡大し10名としている。

学費については昭和56年度以降スライド制を採用していたが、平成8年度以降の経済成長の鈍化を理由に見直しがなされた。平成9年度から、それまでのスライド制を廃止し、新入生及び在学生の学費は入学年度に定めた固定学費とされ、据え置くことによって学費負担の軽減がはかられている。また、学費の分納・延納制度も設けられている。

### C群 編入学生及び転科・転部学生の状況

#### [現状把握]

造形学部において3年次編入学試験は、平成12年度まで主に学内短期大学部学生の進学希望者に対する造形学部・短期大学部連動教育として位置づけられていた。同時に退学者等の欠員が生じた場合の欠員募集を勘案して実施されてきた。教育組織の改組転換により平成13年度以降からは本学の短期大学部からの志願者はなくなる結果となったが、編入学の募集人員について定員の定めのある学科とそうでない学科が存在することは上記の理由による。現在では、学内外より広く、美術、デザインの専門性を高めることを希望する者の受け入れを主目的として、3年次編入学試験を実施している。募集人員は表6の通りである。

出願資格は、学士の学位を有する者または取得見込みの者、短期大学卒業者または卒業見込み者、高等専門学校卒業者または卒業見込み者、大学に2年以上在学し、62単位以上を修得した者または修得見込みの者、専修学校の専門課程を修了した者または修了見込み者、外国において学校教育における14年以上の課程を修了した者または修了見込み者、学校教育法施行規則第92条の3の規定により、大学の第3学年に編入学できる者であり、美術、デザイン分野の学習経験等の条件は特に設けていない。

学生の受け入れ

〈表 6 造形学部 3 年次編入学試験定員〉

学部	学科	定員	
造形学部	日本画学科	若干名	
	油絵学科	油絵コース 版画コース	20 名
	彫刻学科		若干名
	視覚伝達デザイン 学科		10 名
	工芸工業デザイン 学科	クラフトデザインコース インダストリアルデザインコース インテリアデザインコース	20 名
	空間演出デザイン 学科	セノグラフィデザインコース 空間計画・空間構成コース ファッションデザインコース	15 名
	建築学科		若干名
	基礎デザイン学科		10 名
	映像学科		若干名
	芸術文化学科		若干名
	デザイン情報学科		若干名

なお、上記の短期大学部との連動教育の名残ではあるが、出願時に本学造形学部通信教育課程に正規の課程として1年以上在学している者（見込み者を含む）をA群、それ以外の者をB群とし、A群の志願者に対しては出願書類の簡素化等の便宜をはかっている。しかし試験内容についてはA群、B群とも共通となっており、合格者の判定についても、定員を設けている学科においても群ごとの定員はなく、A群、B群全体の高得点者より合格としている。

また、芸術文化学科においてはB群に社会人入学試験を設けている。社会人入学試験の出願資格は大学、短期大学、高等専門学校、専修学校専門課程を卒業または修了した者および大学に2年以上在学し、62単位以上を修得した者で、平成17年4月1日現在、満24歳以上で、職務経験（臨時勤務も含む）が通算3年以上の者となっている。

選考方法は各学科の専門性に則した内容となっており、その詳細は表7の通りである。

基礎デザイン学科については平成16年度より秋期日程試験を実施しており、募集人員は秋期日程・全学科実施日程あわせて10名である。

留学生・帰国生に対しても門戸を開いている。特に試験を行う上で特別な配慮はしておらず日本人と同等の条件による試験を実施しているが、毎年度多くの留学生からの出願がある。平成16年度3年次編入学試験には留学希望生15名からの出願があり、その内10名の者が合格をしている。

〈表 7 造形学部 3 年次編入学試験選考方法〉

学科	選考方法	持参作品等
日本画学科	書類審査、面接、作品審査、 実技試験[鉛筆デッサン]	A群:①実技作品2点[近作]②デッサン2点[A2 程度] B群:①近作2点[50 号以上]②日本画作品1点[20 号以上]
油絵学科	書類審査 面接 作品審査 実技試験	A群:①近作2点およびエスキースまたはそれに関連する デッサンをカルトン[51 cm×66 cm以上]両開き分 B群:①実技作品2点[絵画作品は 100 号以下] ②そのほかにポートフォリオを持参してもよい
彫刻学科	書類審査、面接、作品審査、 実技試験[鉛筆デッサン]	①実技作品[近作]3点 [面接時にその他としてポートフォリオを持参してもよい]
視覚伝達 デザイン学科	書類審査 作品審査 実技試験	①ポートフォリオ [A3 サイズの台紙 20 枚以内に、写真、コピー、オリジナル、 文章を構成し、作品またはその制作過程をまとめたもの]
工芸工業 デザイン学科	書類審査 面接 作品審査	A群:①作品3点[実物またはポートフォリオ] B群:①②のいずれかを提出すること ①作品3点[実物またはポートフォリオ] ②論文とこれまでの調査・研究活動など
空間演出 デザイン学科	書類審査、面接、作品審査、 実技試験	A群:①実技作品または論文を含め近作3点 ②ポートフォ リオ B群:①近作3点②ポートフォリオ
建築学科	書類審査、面接、作品審査、 実技試験[デザインテスト]	A群:①実技作品[近作] B群:①面接時、近作があれば持参
基礎デザイン学 科	書類審査、面接、小論文[出題による] 論文または制作物の審査	①論文または制作物
映像学科	書類審査、面接、作品審査、 小論文[出題による]	①2年以内に制作した作品 2 点 [論文またはポートフォリオも含む]
芸術文化学科	A群・B群[一般] 書類審査 面接 過去 2 年間の学習および研究成果による 審査	①ポートフォリオ [過去 2 年間の作品・論文など、学習および研究成果を、ファ イル形式によって、わかりやすくまとめたもの]
	B群[社会人] 書類審査 面接 これまでの研究、業績および職歴による 審査	①ポートフォリオ [これまでの研究および業績のわかるものを、ファイル形式に よって、わかりやすくまとめたもの]
デザイン 情報学科	書類審査、面接、小論文[出題による]、 過去 2 年間の研究成果による審査	①ポートフォリオ

## 学生の受け入れ

また、造形学部生が他学科への転科を希望する場合は3年次編入学試験を受験し、合格すれば転科することができるようになっている。平成16年度は201名の志願者があり、96名が合格したが、その内14名が学内からの転科希望者であった。

### [点検・評価]

編入学定員については(9)学生収容定員と在籍学生数、(編)入学定員と入学者数の比率の適切性の項ですでに述べたが、造形学部・短期大学の連動教育が終了した現在、3年次編入学試験によって現在の水準の学生を引き続き定員通り確保できるかは多くの問題を含んでいる。また同様に学則に位置づけられた転科を3年次編入学試験合格者の中の学籍上の取り扱いとして処理していることについても制度上問題があると言わねばならない。転科については本来、造形学部 に在籍している学生の進路変更を審査のうえ認める制度で、学外からの優秀な学生を受け入れるための編入学試験とはその理念や選考の基準は異なるものであり、切り離して実施されるべきものである。しかし編入学試験の現状から、今すぐ3年次転科審査を編入学試験と切り離して実施することは困難であるものの、将来においては編入学試験と切り離した制度として独立させるべきものと考えられる。

### [改善・改革方策]

編入学定員等については、前述の通り学科定員等検討委員会において検討を行っている。また編入制度ならびに転科制度については編入制度整備委員会を経て、将来構想委員会の中の教育課程検討専門委員会にて検討がなされた。その骨子については審査の基本的な考え方、実施時期、3年次編入学試験との併願の可否、及び受入数などである。

他大学では、毎年ある程度の退学者が出て欠員が生じ、収容定員通りの学生数を確保するために、3年次ばかりでなく2年次あるいは4年次の編入受け入れを実施している例もある。今後、本学でも短期大学部からの志願者がなくなった状況の中、広く多様な分野からの志願者を受け入れるための方策をとって、3年次編入ばかりでなく、2年次からの受け入れといった制度の検討も視野に入ってくると考えられる。

また一方で、近年転科希望の学生が増加していることに伴い、入学後の適正判断、入学前からの希望実現などのために転科制度を明確化し、学生が早い時期にやり直しができる方策を講じることも必要であり、同時にカリキュラムの履修・指導上も無理なく受け入れられる2年次転科制度も検討課題に挙げられている。

## 2. 大学院における学生の受け入れ

A群 大学院研究科の学生募集の方法、入学者選抜方法の適切性

B群 成績優秀者等に対する学内推薦制度を採用している大学院研究科における、そうした措置の適切性

### [現状把握]

本学大学院造形研究科には修士課程ならびに博士後期課程が設置されている。造形研究科の学生募集は修士課程、博士後期課程とも一般選抜のみを行っている。学内の志願者はすべて学外の志願者と同条件のもとに同内容の入学試験を受けることになっており、学内推薦制度は採用していない。募集定員は修士課程が美術専攻 28 名、デザイン専攻 28 名、博士後期課程が造形芸術専攻 6 名となっている。

修士課程は専攻内でさらに専門に則したコース制をとっている。美術専攻には日本画コース、油絵コース、版画コース、彫刻コース、造形学コース、芸術文化政策コースが、デザイン専攻には視覚伝達デザインコース、工芸工業デザインコース、空間演出デザインコース、建築コース、基礎デザイン学コース、映像コース、デザイン情報学コースが設けられている。各コースの専門性がきわめて高いことから、入学試験はコースごとに実施されている。より多様な学生の受け入れ、学部生の進路選択の観点から、コースによってはA日程（10月）とB日程（2月）の年2回実施している。平成16年度の日程別試験実施状況は表8の通りである。

〈表8 大学院造形研究科（修士課程）入学試験日程〉

専攻	コース	入学試験日程	
		A日程(10月)	B日程(2月)
美術専攻	日本画コース	—	○
	油絵コース	—	○
	版画コース	—	○
	彫刻コース	—	○
	造形学コース	○	○
	芸術文化政策コース	○	○
デザイン専攻	視覚伝達デザインコース	○	○
	工芸工業デザインコース	○	—
	空間演出デザインコース	○	○
	建築コース	○	○
	基礎デザイン学コース	○	○
	映像コース	○	—
	デザイン情報学コース	—	○

## 学生の受け入れ

試験科目については大学院の教育目的である「武蔵野美術大学大学院は、学部における一般的・専門的教育の基礎のうえに、美術・デザインに関する専門の技能、理論および応用を教授研究し、その深奥を究めた人材を養成し、もって文化の創造・発展に寄与することを目的とする。」（武蔵野美術大学大学院規則第1条）に基づき、小論文、面接を課し、幅広い教養、論述力、研究テーマならびに研究計画、研究に対する姿勢をみる一方、各コースで研究を進めるにあたり必須となる専門的な技能、知識を作品、論文審査、各コース独自の試験によってみている。その詳細は表9の通りである。

また博士後期課程においても大学院の教育目的である「武蔵野美術大学大学院は、学部における一般的・専門的教育の基礎のうえに、美術・デザインに関する専門の技能、理論および応用を教授研究し、その深奥を究めた人材を養成し、もって文化の創造・発展に寄与することを目的とする。」（武蔵野美術大学大学院規則第1条）に基づき、専門的な業績をみる口述試験、作品・論文審査とともに小論文、外国語を課している。

なお、受験資格事前審査の制度により、学士の学位を持たないものにも、受験資格を与える場を設けている。修士課程では個別入学資格審査により「本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、22歳に達した者および当該年度内に22歳に達する者」について出願を認めている。同様に博士後期課程では個別入学資格審査により「本大学院において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達した者および当該年度内に24歳に達する者」についても出願を認めている。

### [点検・評価]

修士課程、博士後期課程とも、志願者の研究に対する姿勢、当該専門分野に関する業績および能力、研究テーマに対する思考法や方法論をみる試験内容となっており、概ね良好である。

修士課程については入学試験委員会で、博士後期課程については博士後期課程運営委員会で入学試験のあり方等の検討が通年行われている。

### [改善・改革方策]

修士課程については現在のところ改善・改革を要する点はないといえる。博士後期課程については平成16年度より新たに開設された課程であり、入学者選抜も平成16年度が初めてであった。平成16年度入試においては学生募集、入学者選抜とも問題なく実施されたが、今後の状況を見守り、必要であれば改善、改革を検討する。

〈表 9 大学院造形研究科（修士課程）選考方法〉

専攻	コース	選考方法	提出作品等
美術専攻	日本画コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、実技(素描)	日本画近作 50 号以上 2 点
	油絵コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、実技(デッサン)	近作 100 号程度 2 点 (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)
	版画コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、実技(デッサン)	版画近作 5 点 (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)
	彫刻コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、実技(立体制作)	彫刻近作 2 点 (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)
	造形学コース	書類審査 面接 作品審査 小論文 外国語 (英語、仏語から1つ選択、外国人は日本語)	A 日程:研究計画書 (大学院において研究したいテーマと方法、計画、問題意識について 400 字詰め原稿用紙 5 枚程度にまとめたもの) B 日程:近作 1 点(作品または研究論文) (作品にはその創意思図について 2000 字程度の解説を添える)
芸術文化政策コース	書類審査、面接、 作品審査、小論文(英語含む)	ポートフォリオ	
デザイン選考	視覚伝達デザインコース	書類審査、面接、 作品審査、小論文および設問	ヴィジュアルデザインに関する近作 2 点以上 (ただし提出物に研究論文を加えてもよい)
	工芸工業デザインコース	書類審査 面接 作品審査 小論文	工芸工業デザインに関する下記のものを出 ①作品2点以上 ②ポートフォリオまたは論文 ③大学院入学後の研究計画案
	空間演出デザインコース	書類審査、面接、 作品審査、小論文	空間演出デザインに関する近作 2 点以上
	建築コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、外国語(英語)	近作(建築作品)
	基礎デザイン学コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、外国語(英語、ただし外国人は日本語の選択も可)	近作 1 点(作品または研究論文) (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)
	映像コース	書類審査、面接、 作品審査、小論文	近作 2 点 (論文またはポートフォリオも含む)
	デザイン情報学コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、外国語(英語)	近作 1 点(作品または研究論文) (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)

## 学生の受け入れ

A群 他大学・大学院の学生に対する「門戸開放」の状況

B群 「飛び入学」を実施している大学院研究科における、そうした制度の運用の適切性

B群 社会人学生の受け入れ状況

### [現状把握]

造形研究科では、基礎となる本学造形学部出身者以外からも広く学生を受け入れている。修士課程における過去5年間の受け入れ状況は表10の通りである。

〈表10 大学院造形研究科（修士課程）学外からの合格者の推移〉

	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
学外からの志願者数	51	50	56	51	76
学外からの合格者数	22	22	27	21	32

同様に博士後期課程においても、他大学の修士課程修了者を受け入れている。平成16年度受け入れ者11名のうち、他大学修士課程修了者は2名である。

修士課程、博士後期課程とも入学試験は本学出身者、他大学出身者とも同条件、同内容の試験方法となっており、厳正かつ公正な判定が行われている。

現在、本学出身者の「飛び入学」は実施していない。また社会人学生についての受け入れも行っていない。

### [点検・評価]

修士課程においては他大学出身の学生が例年約40%弱を占めており、受け入れ状況は良好であるといえる。博士後期課程においても募集初年より他大学院出身の学生を受け入れている。

「飛び入学」については、制度自体新しいため、現在のところ導入を検討するに至っていない。

また造形研究科では現在、社会人が仕事を続けながら単位を修得できるような昼夜開講制等の仕組みは導入していない。これは美術、デザインという専門分野の性質上、集中的に通学し、時間をかけて制作・研究を行うことが不可欠なためである。したがって、社会人のみを対象とした入試制度は導入していない。

### [改善・改革方策]

特に改善・改革を必要とする点はない。他大学出身の学生を受け入れることによって、造形研究科の活性化が期待できることなどから現在の状況を維持していきたい。

C群 外国人留学生の受け入れ状況

### [現状把握]

造形研究科では外国人留学生も広く受け入れている。修士課程における受け入れ状況は表11の通りである。

〈表 11 大学院造形研究科（修士課程）外国人留学生合格者の推移〉

	平成 12 年度	平成 13 年度	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度
外国人留学生志願者数	28	20	24	28	32
外国人留学生合格者数	11	8	10	15	15

なお、入学試験は基本的に日本人の受験生と同条件、同内容となっているが、理論的な研究を積極的に受け入れている美術専攻造形学コース、デザイン専攻基礎デザイン学コースでは、外国語の試験において、外国人留学生は日本語を選択できる措置をとっている。

博士後期課程においても、外国人留学生を受け入れている。平成 16 年度受け入れ者 11 名のうち、外国人留学生は 2 名である。入学試験は日本人の受験生と同条件、同内容となっている。

[点検・評価]

修士課程においては、志願者のうち例年約 40%が合格しており、受け入れ状況は良好であるといえる。博士後期課程においても募集初年より外国人留学生を受け入れている。

[改善・改革方策]

改善・改革を必要とする点はない。外国人留学生を受け入れることによって、造形研究科の活性化が期待できることなどから現在の状況を維持していきたい。

- A群・恒常的に著しい欠員が生じている大学院研究科・専攻における対処方策の適切性
- ・ 収容定員に対する在籍学生数の比率および学生確保のための措置の適切性

[現状把握]

造形研究科の入学定員、収容定員と在籍学生数は「大学基礎データ調書（表 18）」の通りである。入学定員は修士課程 56 名（美術専攻 28 名、デザイン専攻 28 名）となっており、平成 16 年度に開設された博士課程造形芸術専攻の入学定員は 6 名となっている。収容定員は修士課程 112 名（美術専攻 56 名、デザイン専攻 56 名）となっており、博士課程造形芸術専攻の収容は 6 名となっている。造形研究科全専攻の収容定員は 130 名である。

また造形研究科美術専攻は収容定員 56 名に対し在籍学生数が 93 名となっており、収容定員に対する比率は 1.66 倍となっている。造形研究科デザイン専攻は収容定員 56 名に対し在籍学生数が 88 名となっており、収容定員に対する比率は 1.57 倍となっている。修士課程収容定員 112 名に対しての修士課程全学年の在籍学生数は 181 名で収容定員の 1.62 倍となっている。造形研究科造形芸術専攻は収容定員 18 名に対し在籍者が 11 名となっており、収容定員に対する比率は 0.61 倍となっている。比率が低い数値となっているのは博士課程として新設されたばかりであることによる。

学生確保のために大学院造形研究科の課程案内を作成している。また修士課程、博士後期課程とそれぞれに募集要項を作成し、志願者への広報活動を行っている。また、博士後期課程については特別奨学金として「武蔵野美術大学大学院博士後期課程奨励奨学金制度」を設けている。

## 学生の受け入れ

### [点検・評価]

本学の教育をさらに深化させるためには、大学院を設置し、学部・学科構成を充実、完結する必要があるとの設置趣旨により、昭和48年4月大学院造形研究科修士課程が認可された。発足当時の収容定員は造形研究科美術専攻14名、デザイン専攻14名の1年次の入学定員合計28名、2年次合わせて56名であった。平成6年度より、修士課程美術専攻28名、デザイン専攻28名と1年次の入学定員は合計56名と定員増となり、平成16年度現在では、2年次までの合計収容定員112名となっている。また、平成16年度には後期博士課程として入学定員6名、合計収容定員18名の造形芸術専攻が認可され、大学院造形研究科の収容定員は拡大してきた。

収容定員に対する在学学生数は現在1.6倍と超過している。しかし、受入人数については各コース研究室からの希望により、学生の相互啓発・活性化や指導効果等の観点から望ましいと思われる募集人数を確保した結果であり、超過人数もコース毎では数人なので、授業に支障ない範囲での受け入れとなっている。また、退学者数も平成15年度には3名（除く博士課程）となっており、定着率は高いといえる。

博士後期課程の「武蔵野美術大学大学院博士後期課程奨励奨学金制度」は当該年度の授業料の半額を3年間に渡り贈与するものである。入学者に対して「奨励生採用願」を提出することを義務付けているが、入学者全員に適用される。そのため応募者の確保には効果があったと評価できる。

### [改善・改革方策]

学生確保のための大学院のあり方については平成4年度から検討されてきている。各大学の「大学改革」が試行され始めた平成2年に教育課程検討委員会が設置され、「本学の教育課程（大学院、学部・短大・通信）を根本的に、かつ早急に見直す」という大きな課題が提起された。平成4年7月には大学院整備美術系懇談会と大学院整備デザイン系懇談会の第1回会議が開かれるなど、大学院についての検討も開始され、同年11月には両懇談会からの報告書が提出されている。さらに両懇談会は大学院整備委員会の美術系分科会とデザイン系分科会に引き継がれ、平成5年6月には大学院整備委員会デザイン系分科会、同部美術系分科会から中間答申が出され、研究環境としての条件を備えた校舎や設備の必要性・独立した研究機関としての大学院大学構想・開かれた大学院・国際交流の拠点としての大学院等の課題が掲げられた。その後、検討は平成6年4月に設置された将来構想委員会へと引き継がれ、改善にむけての検討が引き続き行われている。

また、本学のこれからのあり方を見据えた上で、「大学全体の規模を変更しない範囲で」との条件のもとに、定員充足率・教育内容といった観点から入学定員の見直しを行い、平成18年4月より実施可能な形で検討することを目的として、1年間に期間を限定し「学科定員等検討委員会」を設けることとしたが、検討事項として大学院造形研究科の定員の見直しも項目としてあげており、修士課程入学定員56名の増員の可能性を検討している。また収容定員に対する在学学生数は現在1.6倍と超過しているが、現状に合わせて定員を変更することで届け出を行うほうが妥当であると思われる。